
R P Gさんと続き

浮魚塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPGさんと続き

【Nコード】

N1527K

【作者名】

浮魚塩

【あらすじ】

僕の隣の席には変な女の子が居る。その子は『RPGさん』と呼ばれていた。…って話のあとの話。

（前書き）

これは短編小説『RPGさんと一日』の続きにあたるお話です。未読の方はそちらを先に読まれると楽しめるかもしれません。

以前に比べるとネタは弱いですが、まったりしたり、ニヤニヤして頂ければ幸いです。

僕の隣の席にはちよつと変わった女の子が居る。

かすがしい
春日椎。通称、RPGさん。

容姿はいたって普通。推して可愛いというわけではなく、だからといって不細工というわけでもない。特に浮くこともないだろうし、目立つこともないだろう。あのおかしな性格がなければだけど。

僕はあの日から、彼女のパーティに加えられてしまった。

「あ……」

「どうしたの春日さん？」

「武器が壊れた……」

「鉛筆の芯が折れたの？ ……ってか鉛筆？！」

「初期装備の木刀とか、何故か売れなかったりするよね」

「あ、ストーリー中でその時しか手に入らなかったりするもんね」

「愛着が沸くんだよ」

「……ん？ でも初期装備って、いつからその鉛筆使ってるの？」

「……………」

「おーい」

「バックパックの中には歴戦の武器防具が溜まっていくものだよ……」

「うん、だからって折れたシャーペンや液漏れのボールペンまで筆箱に入れなくてもいいよね？」

「……………」

「……………」

「愛着が……」

「……ごめん」

春日さんは、意外と、っていう風に言うと失礼かもしれないけど人がいい。

「春日、このポスターを後ろの掲示板に張っておいてくれないか？」
「はい」

先生に頼まれて、春日さんが画鋏のケースとポスター片手に教室の後ろの掲示板へトコトコ歩いていく。

「春日さん、手伝おうか？」
「大丈夫」

と、春日さんが一人でポスターを張ったんだけど、微妙に他の掲示物より低い位置になっている。

「ん…」
それが氣にくわなかったのか、春日さんは画鋏を外して張り直す。今度は微妙に傾いていた。

「ん…」
それも氣にくわなかったのか、春日さんは再びポスターを剥がした。

「やっぱり手伝って」
「了解」

僕がポスターを押さえて、春日さんが画鋏を押し付けていく。
残り一ヶ所で張り終わるといふときに、春日さんの手から画鋏のケースが転がり落ちて、大量の画鋏が床にばら蒔かれてしまった。

「ああ、早く拾わないと」
「待って！」

画鋏を拾おうとすると、春日さんが大声でそれを制止した。
「な、何？」

「これは…、ダメージ床！」
「いや、画鋏…」

「レベルの低い篠原くんじゃ、あつという間にお陀仏だよ」
死因が画鋏なんて悲しすぎます。

「この場合は…」

「場合は？」

「レビ。ト！ いや、ト。マナ…？」

「だから早く拾おうよ…」

そんなこんなで無事ダメージ床を解除（ト。マナ使用）し、ポスターを張り終えて、時刻は昼休みを迎えた。いつも通り机を合わせて、友達としゃべくりながら弁当をつついてたんだけど、今日も今日とて隣の席が…。

隣から突然ガタンと大きな音が聞こえてきた。

「か、春日さん？」

春日さんの机がグラグラと揺れていた。

「ど、どうしたの？」

「RPGで食事の描写がほとんど無いということに気が付いた、…今」

「…そういえば、下手すれば最後まで飲まず食わずで行動しているよね、あの人達」

「……………」

春日さんはジッと自分の弁当を見下ろしていた。

「あ、あのさ…、食べれば、いいと思うよ？」

「……………」

「ほ、ほら、食べ物を食べてレベルアップするRPGもあるし」

「…！」

すると、何か思い出したようにしたあと、春日さんは弁当を食べ始めた。

そしてチラリとこちらを向いて。

「篠原くんもたくさん食べなきゃ、レベル3のままだよ」と、何故か得意気に言ってる。

「え…、あ、うん」

あ、待って我が友人、ちょっと机が離れていつてるよ。なんで、どこ行くの。

春日さんには慣れたつもりだったけど、突然来るとやっぱり対応に困るなあ。

帰り道、ふと後ろを振り返る。確かここはフィールド画面って設定だったはず。もしかしたら前みたいに春日さんが後ろに居るかもって思ったんだけど、そんな気配はない。今日はついてきてないみたい。

「春日さん」

ガサッ！

「……………」

……………。

「春日さん？」

ガタッ！

「……………」

……………。

居る！

どこか分からないけど居る！

どうしよう。フィールドだと先頭キャラしか表示されないから、仲間の状態を確認するには。

肩から提げた鞆を手にとって、鞆を開いてみる。

「……………」

「……………」

「…うわっ！？ か、春日さん？」

「呼んだ？」

「う、うん」

仲間の状態を確認するためにはメニュー画面を開けばいいから、所持品を確認するために鞆を開いたらメニュー画面を開いたのと同じだと思ったんだけど、どうやら正解だったみたいだ。

試しに鞆を閉じてみる。

すると春日さんが見えなくなった。…ただ単に素早い動きで電柱の後ろに綺麗に隠れて僕の視界に写らなくなったただけなんだけど。

また鞆を開く。

「……………」

「……………」

「…うわっ！？」

「驚いたの二回目だよ」

そりや音も無く近付かれたらびつくりします。

「いつから居たの？」

「ずっと篠原くんの後に」

そんな背後霊みたいなこと言わないでください。

「今日は何か用？」

「パーティだから」

「まさか、いつも居たの？」

「居たよ」

「……………」

「……………」

「…あの、なんとか見えるようにならない？
びつくりするから。」

「パーティがそろそろついていく方式なら…」

「それをお願いします」

「わかった」

僕が鞆を閉じると、今度は春日さんも隠れずにちゃんと見える位置に居た。

これで普通に歩ける。

と思った僕の考えは甘かった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「…あの、春日さん？」

「なに？」

「そんなにぴったりつかれると、背中がむず痒いんだけど…」

憑かれると言い換えてもいいくらい。一人の時より背後霊だよ。

「前の人が通った道をそろそろついていくから、どうしても…」

「横に並んで歩くとかできないの？」

「そんなの見たことない」

「…確かに」

春日さんとうまく付き合うにはまだ時間が掛かりそうです…。

（後書き）

ネタが思い浮かべば、また書くかもしれないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1527k/>

RPGさんと続き

2010年10月8日15時23分発行